徳川家達公爵と中浜東一郎との交流
－「中浜東一郎日記」から読み解く　その２－

塚本　宏

エ 「贈位・記念碑」と「宝剣の箱書」

このように見てくると、家達と東一郎が、年を追って親密の度を深めていったことは明らかである。そのきっかけを作る大きな要因として、学習院女学部在学中から親交のあった「二人の綾子」の存在を無視することはできない。

折しも、昭和3年11月10日に、昭和天皇即位の大典に際し、万次郎に対して正五位の贈位があり、つづいて翌4年5月に「贈正五位中濱萬次郎翁記念碑」が土佐清水・中ノ浜に完成し、除幕式が挙行されたのである。 式典の最後に、万次郎の遺族を代表して東一郎は、「……公爵徳川家達閣下は、…御揮毫を辱ふせられたるは衷心より感謝いたす処にて、此碑に一層の光彩を添へたる事には、謹んで公爵閣下の御厚意に対し深甚なる謝意を表する所であります」と丁重に感謝の気持ちを述べている。[17]この言葉を裏書きする事実が「日記」には記載されている。東一郎の父・万次郎に対する尊敬と孝心がよく表れているので、以下抜粋して紹介しておきたい。

贈位発表の翌月には、早速、東一郎は公爵邸を訪ね、家令・成田勝郎に亡父記念碑表面の姓名を公爵に揮毫してもらうことを依頼した＜昭和3年12月7日＞。その4日後、「徳川公爵の成田家令に電話にて問合せしたるに、公爵は余人の依頼にあらず中浜君の事なれば何とか執筆すべしとの御返答なりと云ふ。」＜昭和3年12月11日＞。つづいて14日にも成田家令と面会、「先考記念碑の文を公爵に依頼する事を打合す。字配り等は拙者より差出す事としたり」＜同年12月14日＞。暮の30日には、公爵邸へ「父碑銘揮毫の文字を持参す」＜同年12月30日＞。

年が明けた正月5日に「昨五日午後一時半徳川公爵邸にて新年の賀を受けらる。予は、〔畔柳〕完道（義弟、妻・芳子の弟で書家）と共に行く。清酒を下たされ菓子其他を土産とせらる。公爵の話さるゝには、先考の碑石揮毫は決して忘れす昨年末に認めんと思ひしか果さず、然し悦ばずと云はる（予が郷里にて公爵か揮毫を諾せられたる事を聞き皆悦ひ居れりと云ふたるに対して戯れに斯く云われたるものならん）」＜昭和4年1月6日＞。

1月も下旬となり、徳川邸で成田家令と面談、碑文につき多数の意見（公爵が揮毫せられた箇所を記入しない方が宜しいなど）を述べたところ家令も賛成したので、畔柳完道にも伝えたという＜同年1月21日＞。前述の保科順子の話[8]にも出て来た、家達のユーモラスな風貌と談話を彷彿させる一場面ではなかろうか。

2月末には、「公爵徳川家達殿方より電話にて兼て依頼せられたる書は出来上りたりとの事なり」＜同年　2月24日＞。翌日午前、公爵邸を訪問し「父記念碑の銘出来上り、極めて上出来なり」＜同月25日＞と、満足した様子が記載されている。

3月になると「昨日畔柳完道氏が複写したる先考の碑銘（徳川公爵揮毫）を受取りたり、本日幡多の近藤善太郎氏（清水尋常小学校長、建設会長）に書留にて郵送す。徳川公爵に果物一籠（十五円弐十銭）を丸ビルの千疋屋より贈呈す、但し丁寧の書翰を添ゆ」＜同4年3月2日＞。まさに日記ゆえに、律儀で小まめな東一郎本人の性格が有りのまま表現されており、敬服するしかない。と同時に、家達が千駄ヶ谷邸内で、夜毎、「御書」[8]の時間に揮毫と取り組んでおられる姿が目に見えるようである。

次に、時は移り昭和8年のことになるが、万次郎がハワイの恩人・デーモン牧師へ贈った日本刀（短剣）を研磨・修復してデーモン家へ贈呈したことは、日米間の国際交流の美談として語り継がれている。その詳細は小寺綾子の献身的な活躍も含めて、すでに紹介済み[2)]なのでご参照頂ければ幸いである。

これにも徳川公爵の揮毫した「箱書」が残されているので、「日記」から抜粋してみる。

「…（神戸在住の小寺綾子からの書に）、浅間丸〔一月〕十六日に入港したるもミス、テマン嬢は乗船し居らす、……但し徳川家達公爵に箱書を依頼して箱のふたは東京に送りあり十九日迄に出来の筈なれは浅間丸の出帆に間に合へば、ミス、デマン嬢に依頼せず直に船長に依頼して布哇に送る事としたりと云ふ。」＜昭和8年1月18日＞

3月になり、「…（綾子からの電報よれば）ブレタン号にデモン嬢乗組居り、綾子も面談の上刀剣を渡したるものなる事実確実となり大いに安心したり…」＜同年3月5日＞。

「…今朝デマン嬢の乗船横浜に入港、絹子（四女）は早速ブリタン号に訪問、デマン嬢と面会す。……又箱書きは徳川公爵方に問合したるに出来上りたれは何時にても受取に来る可しとの事なりと電話あり。依て清（次男）に命して受取らしむ（夜帰宅、箱の蓋には公爵徳川家達閣下の筆にて国際親善之寶剣とあり）」＜昭和8年3月6日＞。

「…帰路千駄ヶ谷公爵邸に伺候。面識ある家扶基に面会、デマン嬢に刀剣を渡したる顛末を話しし〔ママ〕、公爵の御揮毫を深謝する旨を述へ且デマン嬢の感謝の意を伝へて帰る」＜同3月12日＞。

このように、東一郎一家が家族ぐるみで、「国際親善之寶剣」をデーモン牧師の遺族に贈呈しようと苦心している様子が生々しく描かれている。

オ 「日本倶楽部」と「日米協会」

ここまで「日記」を子細に検討する作業から、旧幕臣の親睦団体や学習院に在学した「二人の綾子」を介して、家達と東一郎の絆が深まった経緯を明らかにしてきた。さらに、二つの民間団体（前述の年譜には取り上げていない）における両者の関係を見てみたい。

まず、「日本倶楽部」は、明治31年6月に「会員相互の親睦を厚くし、知識の交流、品格の向上を図る」ための社交上の機関として設立され（発起人は、近衛篤麿、岡部長職、鳩山和夫ら）、初代会長は東京府知事（当時の）・子爵岡部長職（1855－1925）であったが、二代目は家達が継承し、死去するまでその職を続けた。[18)]

家達は同31年、すでに華族会館長に就任しており義兄・近衛篤麿との関係からも、当然、創設時からの会員であったし、東一郎も明治33年には回生病院長で、同36年12月に倶楽部から「入会承諾の通知」を受けている＜同年12月24日＞ので古くからの会員仲間であった。

倶楽部の所在地は麹町区有楽町1丁目5番地だったので、東一郎は、回生病院の自宅からも近く、保険会社のほか鎌倉病院へ掛け持ち診療で毎週2、3回、新橋停車場から鎌倉へ通勤するという事情もあり、倶楽部を頻繁に利用していたことが「日記」に記載されている。倶楽部主催の行事（講演会、祝賀会、歓送迎会など）への出席は言うに及ばず、明治生命の阿部頭取始め保険会社や医学関係者との懇談、会食などの交友、果ては、株や不動産取引の交渉場所にも多用していた。東一郎は、将棋を趣味としていたので、ここで財界の名士たち（柳沢保恵（第一生命）、服部金太郎（服部時計店創業者）など）と将棋を楽しんでいたのも興味深い。

しかし、日本倶楽部において両者の親密な交友関係が始まった形跡は認められない。やはり、政治家と医学博士という専門分野の違いはもとより、社会的な地位、出自など、まさに住む世界が違う両者には接点がなかったのである。筆者の言う「二人の綾子」説を補強することになるであろうか。

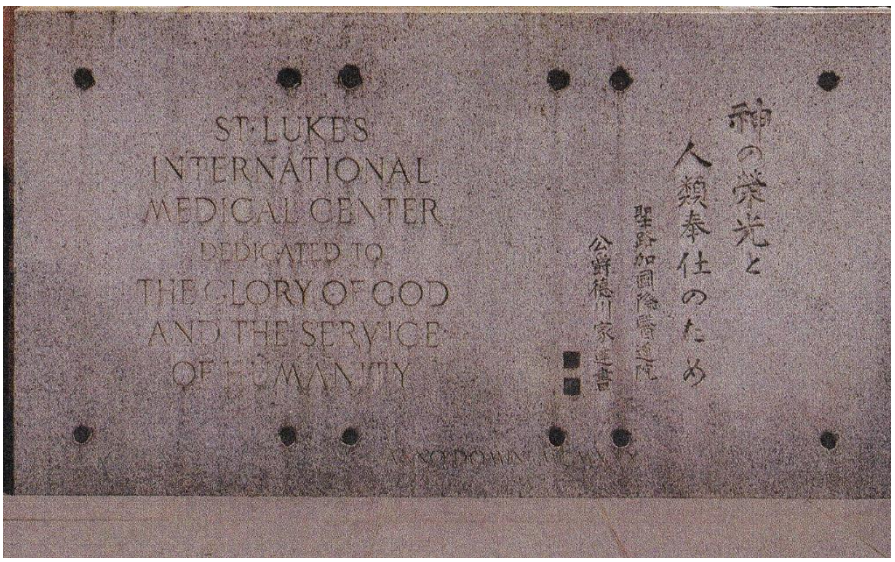
次の「日米協会」の方は、国際外交の舞台がからむのでそれほど簡単には語れないが、同協会編纂の資料[19]を引用しながら、日米親善に心を砕いた家達の活動の一端を垣間見てみよう。

日米協会は、大正6（1917）年、生涯、日米協調に尽力した金子堅太郎子爵（のち伯爵、1853－1942）を初代会長として設立された。1924年に成立した「排日移民法」（皮肉なことにクーリッジ大統領が署名している）が日本政府はもとより日米協会に大きな衝撃を与えたが、これが契機となって金子会長が辞任し、副会長の徳川家達が二代目会長に就任（死亡時まで継続して在任）した。彼の社交的性格もあって、就任後の日米間の交流は多種多様な分野において一段と活発になり、とくに相互理解に重点が置かれるようになった。

満州事変の勃発（1931年）までの短い期間ながら、家達が「日米協調」路線のもと活躍した時期における2、3の実例を取り上げてみると次のとおりである。

① 大正12（1923）年9月1日に発生した関東大地震に対して、「クーリッジ大統領の命令」による米国政府総掛かりの緊急物資や多額の義援金による絶大な復興支援がなされたことは有名である。[20]ニューヨークや西部諸都市の民間市民からの支援も見逃せず、日米協会がその窓口になったことは言うまでもない。

余談になるかもしれないが、震災により焼失した聖路加病院の復興再建も、トイスラー院長のアメリカでの募金活動[21]だけではなく、日米協会を通じて一般寄付の中から1万ドルが配分されている。奇しくも、戦前の聖路加病院・旧館跡に残る「定礎石」に刻まれた「神の栄光と人類奉仕のために…」の文字は、徳川日米協会長・日赤社長の揮毫によるものである。[21]



② 交流事業の大衆化の例として、大西洋横断無着陸飛行のヒーロー、リンドバークの来日（1931年8月末）や、ベーブ・ルース、ルー・ゲーリッグなどMLB選手の来日と日米親善試合（1934年秋）があげられるが、時のグルー駐日大使は「ベーブは私が逆立ちしても及ばぬほど効果的な大使である」と日米関係における民間の歓迎ムードを大きく評価している。[22]

残念ながらこれ以降、徳川会長らの努力も虚しく、不幸な日米開戦へと突き進むことになるのであるが、日米協会が、他の組織にはない独自の政治的性格を生かして、緊迫する日米関係を打開する道を探ろうとした関係者の努力の軌跡を忘れてはならない。

もちろん、東一郎に外交問題などの政治的活動を求めることは酷というものであろう。「日記」には、グルー大使の着任歓迎会に出席したことが記載されている。「……新米国大使 Mr.and Mrs.Joseph Clark Grew 氏を華族会館に招待して歓迎会を開く。日米協会の催なり。予も出席する様案内あり。清（次男）は会員なる王子製紙社々員福喜多靖之助課長か同伴。共に出席。出席者二百名計り、盛会なり。……燕尾服、清はタクシード。徳川公爵（家達君）、石井子爵幷大使グリュウ氏の演説あり」＜昭和7年6月21日＞。

暗雲立ち込めるなか、草の根の「日米親善友好」にとって戦前最後の記念碑的パーティとなった、中浜清夫妻主催の「マーセラス歓迎晩さん会」が、帝国ホテルで昭和15（1940）年7月8日に行われたのである[23)]。家達、東一郎、清のほか石井子爵も一堂に会した先の新大使歓迎のパーティからちょうど8年が経過しているが、グルー大使夫妻も出席され、そのスピーチは全米にラジオ放送されたそうである。もちろん、本稿の主役の二人、家達と東一郎の没後のことで残念ながら同席しようもなかった。

没後といえば、その詳細は不明であるものの、間違いなく中浜家当主の中浜清の手により、雑司ヶ谷霊園の中浜家墓域内に建てられたもう一つの記念碑（昭和15年7月と刻まれている）もまた、家達の揮毫によるものであった。

結び

近代日本史のなかで、「第十六代様」と呼ばれた徳川家達公爵を歴史上の人物としてどう評価すべきか、いまだ十分な研究がなされているとは言い難い。しかし、徳川家広の言うとおり、その生涯を通じて「親英米派の中心人物にして、議会制の柱石と大日本帝国の西欧化の主要な担い手」であり、また、「（『元和偃武』以来続いた）徳川時代の一大特質である平和主義を外交の場で実践」した人物であったことも認めなければならない。[24)]

同時に、明治維新後、徳川宗家当主としての威厳を保ちながら、旧幕臣たちの親睦団体の団結・交流に尽力してその頂点に立っていた。一方、家庭内においては、私人として温和で、ユーモラスな一面ものぞかせ家族から愛される趣味人でもあった。

その徳川家達公爵とは、全くの「別世界」に住みながら、中浜東一郎一家が家族ぐるみで、ジョン万次郎所縁の「草の根日米交流」に尽力してきた長年の実績には見るべきものがあり、両者に立派な共通項があることを強調しておきたい。家達と東一郎を結び付ける架け橋となったのが、「二人の綾子」という娘たちであったことを、筆まめな東一郎の「日記」の詳細かつ綿密な記載から証明出来たことに細やかな喜びを感じている。

註

1）中浜東一郎『中濱萬次郎傳』（冨山房、1936年）、460－473頁、「記念碑」建設のことが詳細に報告されている。

2）a　塚本　宏「ジョン万次郎と日米親善外交（戦前編）」、『土佐史談、第257号』（2014年）120－122頁

b 「東一郎一家と戦前の日米草の根外交」、『草の根通信　Vol.80、2016.9.16』、8－9頁、国際草の根交流センター・事務局に「箱書きと刀剣」の写真（轟木ひろ子氏撮影）が保管されている。

3）樋口雄彦『第十六代徳川家達―その後の徳川家と近代日本―』（祥伝社、2012年）、191－196頁

4）柳田直美『家康、吉宗、家達~転換期の徳川家~』（徳川記念財団、2008年）、68－69頁

5）前掲3）、5頁

6）原口大輔「徳川家達と大正三年政変」、『日本歴史　2015年6月号（805）』（吉川弘文館）、68－84頁

7）松平豊子『春は昔－徳川宗家に生まれて―』文春文庫、2012年、（単行本は文芸春秋刊、2010年）、14－23頁

8）保科順子『花葵　徳川邸おもいで話』（毎日新聞社、1998年）、a126－134頁、b166頁

9）樋口雄彦『箱館戦争と榎本武揚　（敗者の日本史17）』（吉川弘文館、2012年）、195－200頁

10）前掲9）、200－201頁

11）前掲3）、166－169頁

12）『学習院百年史』第一篇（学習院、1981年）、481頁

13）「卒業終了及修業者並入園者名簿」、『女子学習院五十年史』（1935年）、114－119頁

14）倉持基『秘蔵写真でたどる　華族のアルバム』（株式会社KADOKAWA、2015年）、138－140頁

15）塚本　宏「『中浜東一郎日記』に見る晩年の万次郎」、『土佐史談、第257号』（2014年）、93－110頁

16）「同方会誌三十五」（明治45年）、76頁、『同方会誌　複製版第6巻』（立体社、1977－78年）

17）前掲1）、470頁

18）「日本倶楽部」についてはWikipediaから引用

19）日米協会編、五百旗頭真ほか監修「『もう一つの日米交流史―日米協会資料で読む20世紀―』（中央公論新社、2012年）

20）前掲19）、63頁

21）a『聖路加国際病院の100年』（聖路加国際病院、2002年）、87－99頁

「刻まれた文字は、『神の栄光と人類奉仕のために　聖路加国際病院』と読める。これは　”ST.LUKE’S INTERNATIONAL MEDICAL CENTER DEDICATED TO THE GLORY OF GOD AND THE SERVICE OF HUMANITY”を、東京帝国大学教授・姉崎正治博士が邦訳されもので徳川公爵の筆になるものである。」

b　日野原重明『戦争といのちと聖路加国際病院ものがたり』（小学館、2015年）

この定礎石は現存しているが、「（戦争中に）薄い御影石でおおわれたときに打ち付けたくぎの跡が残り」痛ましい限りである。

22）前掲19）、92頁

23）前掲2）、123－124頁

24）徳川家広「大日本帝国の中の徳川将軍家―十六代当主家達の履歴―」、『家康、吉宗、家達~転換期の徳川家~』（徳川記念財団、2008年）、65－67頁